博　多 146

— 博多遺跡群第 73 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1234 集

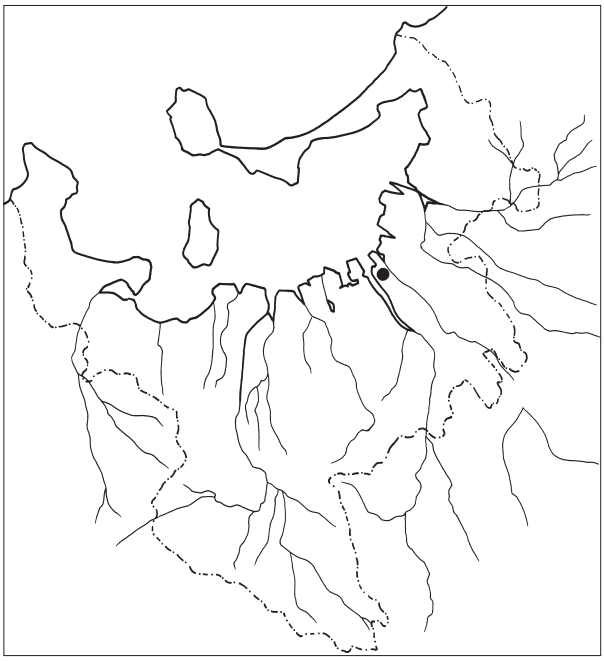
２０１４

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多 146

— 博多遺跡群第 73 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1234 集



遺 跡 略 号　HKT-73
遺跡調査番号　　9120

２０１４

福 岡 市 教 育 委 員 会

巻頭図版

博多遺跡群第 73 次調査出土龍泉窯系青磁

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、事務所建設に伴い、平成３年８月から９月にかけて発掘調査を実施した博多区博多遺跡群第73次調査の成果を報告するものです。遺跡のある博多は中世において対外交渉の窓口として大きな役割を果たしました。今回の報告はその中心的役割を担った禅宗寺院聖福寺旧境内「庫司」に近接する部分の調査で、調査成果は、対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、関係者の方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

平成26年３月24日

福岡市教育委員会

教育長　酒　井　龍　彦

例　言

1　本書は福岡市教育委員会が事務所建設に伴い、福岡市博多区御供所町15内で発掘調査を実施した博多遺跡群第73次調査の報告である。

1　本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
9120	ＨＫＴ－73	146.7㎡	76㎡	1991年8月6日～9月16日

1　本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は佐藤一郎（埋蔵文化財審査課主任文化財主事）が行った。

1　遺物の写真撮影は佐藤、実測・製図は佐藤・整理作業員の小畑貴子が行った。

1　遺物の整理は整理作業員の小畑・古賀美江が行った。

1　本書に用いた方位は座標北である。

1　遺構は2桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSD（溝）、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。

1　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1　本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに…… 5
　1　調査に至る経緯…… 5
　2　調査の組織…… 5
Ⅱ　遺跡の位置と周辺の歴史環境…… 6
　1　遺跡の位置…… 6
　2　周辺の歴史環境…… 7
Ⅲ　調査の記録…… 12
　1　調査の概要…… 12
　2　遺構と遺物…… 12
　　⑴　遺構…… 12
　　⑵　遺物…… 13
Ⅳ 小結 …… 27

挿 図 目 次

第１図 博多遺跡群の位置と周辺の遺跡（縮尺1/25000）…… 6
第２図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺1/10000）…… 8
第３図 博多遺跡群第73次調査発掘地（縮尺1/1000）…… 9
第４図 博多遺跡群第73次調査遺構配置図（縮尺1/80）…… 11
第５図 個別遺構実測図（1）（縮尺1/20）…… 13
第６図 個別遺構実測図（2）（縮尺1/20）…… 14
第７図 出土土器実測図（1）（縮尺 1/3）…… 16
第８図 出土土器実測図（2）（縮尺 1/3）…… 17
第９図 出土陶磁器実測図（1）（縮尺 1/3）…… 18
第10図 出土陶磁器実測図（2）（縮尺 1/3）…… 19
第11図 出土陶磁器実測図（3）（縮尺 1/3）…… 21

第12図 出土陶磁器実測図（4）（縮尺 1/3） …… 22
第13図 出土陶磁器実測図（5）（縮尺 1/3） …… 23
第14図 出土陶磁器実測図（6）（縮尺 1/4） …… 24
第15図 出土陶磁器実測図（7）（縮尺 1/4） …… 25
第16図 出土瓦実測図（縮尺 1/4）銅銭拓影 …… 26

図 版 目 次

図版１　１．１層下面全景（南西から）
図版２　１．３層下面全景（南西から）
図版３　１．B-２南壁面土層（南東から）
図版４　１．ＳＤ26溝（南西から）
図版５　１．ＳＸ09埋甕（南東から）
　　３．ＳＫ11土坑（南東から）
　　５．ＳＢ01石組（南東から）
図版６　出土遺物（1）
図版７　出土遺物（2）
図版８　出土遺物（3）
図版９　出土遺物（4）
図版10　出土遺物（5）
２．２層下面全景（南西から）
２．４層下面全景（南西から）
２．ＳＫ06土坑（南西から）
２．ＳＫ35土壙墓（北西から）
２．ＳＸ10埋甕（南東から）
４．ＳＸ12土壙墓（北西から）
６．ＳＤ15東石組（南東から）

表 目 次

第１表 博多遺跡群御供所町周辺発掘調査一覧表 …… 10
第２表 博多遺跡群第73次調査土師器計測表 …… 28

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経緯

1991（平成３）年３月12日、個人から本市に対して博多区御供所町15における事務所兼共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願書（２－２－458）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の中央のやや南東寄りに位置する。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて同年６月４日に試掘調査を実施した結果、現地表下1.7mの中世の遺物包含層、約2.6mの黄褐色砂上面で遺構面が確認された。申請者と埋蔵文化財は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積146.7㎡の内掘削による影響が及ぶ76㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は同年８月６日から９月16日まで行われた。その後個人が経営する会社が倒産し、整理費用は国庫補助を適用することとなり、調査から20年以上経過した平成24年度に整理、翌平成25年度に報告することとなった。

2　調査の組織

発掘調査主体

福岡市

発掘調査（平成３年度）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課　長	折尾　学
調査第２係長	塩屋　勝利
事前審査担当	横山　邦継（主任文化財主事）
	宮井　善朗（文化財主事）
発掘調査	佐藤　一郎（文化財主事）

整理・報告（平成24・25年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課

課　長	米倉　秀紀
事前審査係長	加藤　良彦
資料整理	佐藤　一郎（主任文化財主事）

埋蔵文化財調査課

課　長	宮井　善朗
調査第１係長	常松　幹雄
調査第２係長	菅波　正人（前任）榎本　義嗣

試掘調査は平成３年に埋蔵文化財課事前審査担当の横山・宮井が行った。

調査・整理の庶務は文化財部埋蔵文化財課（平成３年度）の吉田麻由美・埋蔵文化財審査課管理係（平成25年度）の川村啓子が行った。

発掘作業員

出雲義住・内山和子・奥田弘子・久良木シズエ・舎川キチエ・西田寛文・宮崎芳子・村上エミカ・村上エミ子

整理作業

古賀美江・小畑貴子

また、施工の株式会社橘工務店、地元御供所町内各位、発掘作業員、整理作業員の方々のご協力により、博多遺跡群第73次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

なお文化財部は、組織改編のため平成24年４月１日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

Ⅱ 遺跡の位置と周辺の歴史環境

1　遺跡の位置

博多湾岸には砂丘が形成され、湾に注ぐ河川によって分断されている。博多遺跡群は、博多湾岸のほぼ中央に位置し、東を近世に開鑿された御笠川（石堂川）、西は那珂川が流れる。

本調査地は博多遺跡群の中では南東部にあたり、現在の聖福寺境内地の南西に位置する。

第１図 博多遺跡群の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）

2　周辺の歴史環境

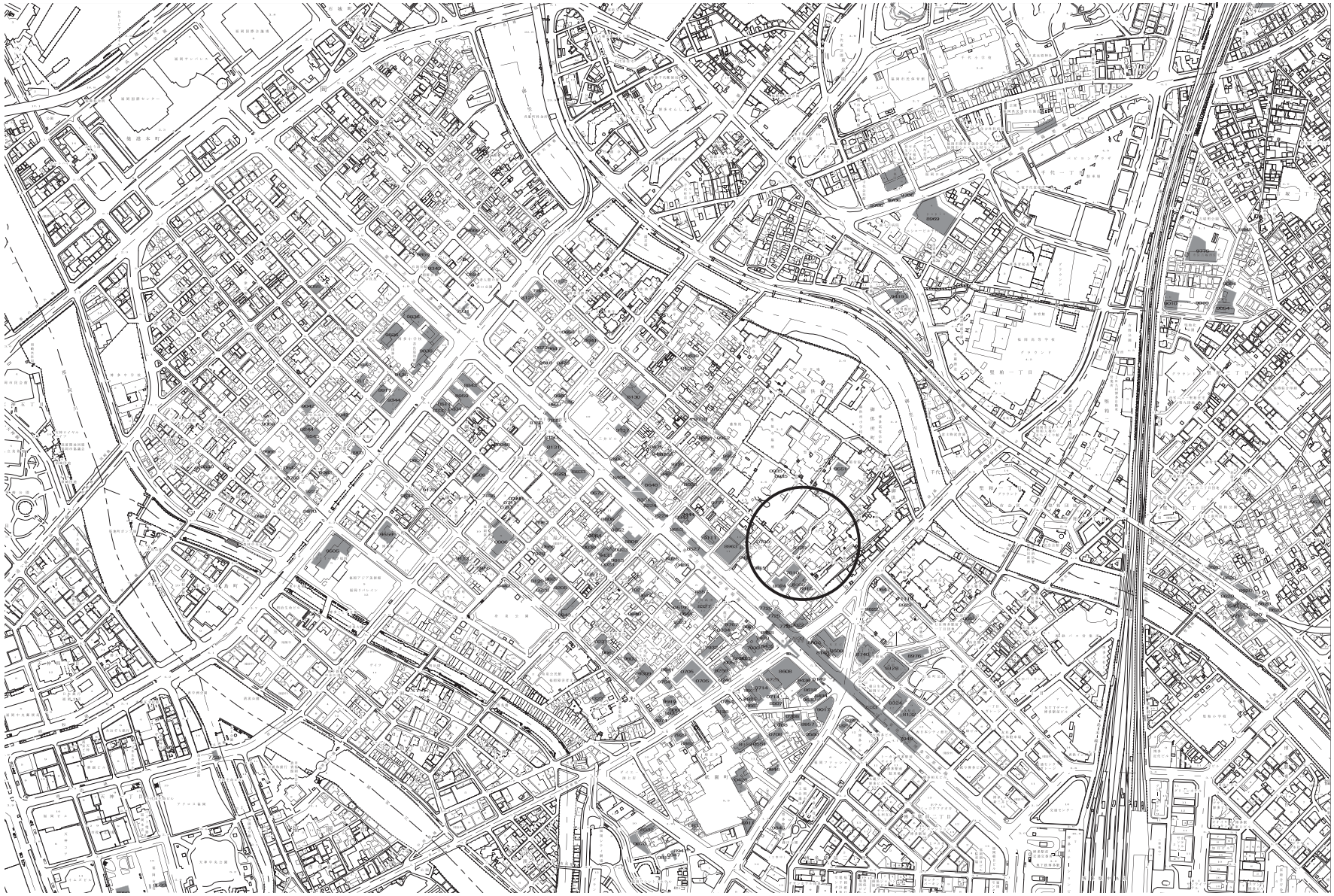
聖福寺は明庵栄西によって創建されたとされるが、その時期については、「元亨釈書」などによる建久６年（1195）説と「聖福禅寺仏殿之記」による元久元年（1204）説がある。

建久６年６月10日の栄西申状は史料的に再検討の余地があるとされるが、宋人が建立した博多百堂の跡に、源頼朝を開基として創建したとある。「博多日記」によると正慶２年（1333）３月13日菊池武時によって博多が焼き払われ聖福寺も被災したとされる。正平10年（1355）に仏殿再建に着手、同22年（1367）に完成するが、これを受けて「聖福禅寺仏殿之記」が翌23年（1368）に記された。その後も戦乱による被災が度重なった。永禄６年（1563）の戦乱で失われた「聖福寺古絵図」は永禄13年（1570）に耳峯玄熊によって修復されたものが伝えられている。中軸線上に三門・仏殿・法堂・方丈が記されている。現在の伽藍配置は三門（1911年完成）・仏殿（1673年完成）・方丈（1845年完成）が一直線に並ぶが、法堂はみられない。伽藍配置を復元するに当たって法堂を加えるのであれば、方丈を背後に引くか三門を前面に出す必要がある。古図では方丈の背後に家並を街路の両側に描くので、方丈の位置は不変で三門は前面の金屋小路に面した総門の位置に比定する説（宮本雅明1989）に沿って、検討してみる。博多遺跡群35･64次調査では、13世紀末から16世紀後半まで機能した幅６ｍの道路遺構が検出されている。両側に側溝を配した幹線道路とみられ、聖福寺伽藍中軸線とほぼ直交する。博多遺跡群62･90次調査地は伽藍の前面に位置し、伽藍中軸線と平行する13世紀後半以降の幅４ｍの道路遺構が検出されている。聖福寺の方へ延長すると現在の勅使門付近に至る。支線道路の一つ、あるいは参道と考えられる。参道とみた場合、当時の伽藍の中軸線が現在より南東に位置していたこととなる。伽藍の中軸線は中世以来不変の方位をとってはいるものの、四至の内、両側面については確定し難い。古図には三門の前方に総門が描かれ、幹線道路に面していたとみる場合30m前面に出る。それにともない三門以下の伽藍を構成する建物も前面に出ることとなるのではないか。

博多遺跡群94次調査（旧塔頭順心庵境内）では15世紀前半から16世紀前半にかけての大溝SD100～103が検出されている。方一町の伽藍（同時期に創建された建長寺は総門前から方丈後まで一町）であることを前提に、総門が幹線道路に面していたとみる場合、伽藍背後の四至の内、方丈の後方は現在の仏殿付近とみられる。古図に描かれた方丈背後の街路とその両側に連なる家並、あるいは塔頭の空間を加えた場合、寺域背後の堀は伽藍の南東で古絵図に描かれたように蛇行し、94次調査検出の大溝とつながる。SD100･102からはコンテナ200箱分の瓦が出土したが、塔頭の建物というより主要伽藍に葺かれたとみられる。「聖福寺仏殿記」によると再建の仏殿は瓦葺きであった。

古図には三門から法堂にかけて回廊がめぐり、回廊の右側辺に接して庫司が配されている。今回報告の73次調査地は聖福寺現境内の南東に位置し、庫司推定地に近い位置にある。出土した南宋後半から元前半にかけての龍泉窯青磁をはじめとする中国陶磁器は同時期の集落遺跡ではまとまって出土するものではなく、鎌倉においても上級武士の居館など出土する箇所が限られ、受容した階層を示すものである。今回出土した一群についても僧侶の什器と考えている。什器を管理した庫司との関連を示すものであろうか。

参考文献　宮本雅明「空間志向の都市史」『日本都市史入門』東京大学出版会 1989、「聖福寺古図」『新修 福岡市史 資料編 中世1 市内所在文書』福岡市史編集委員会 2010

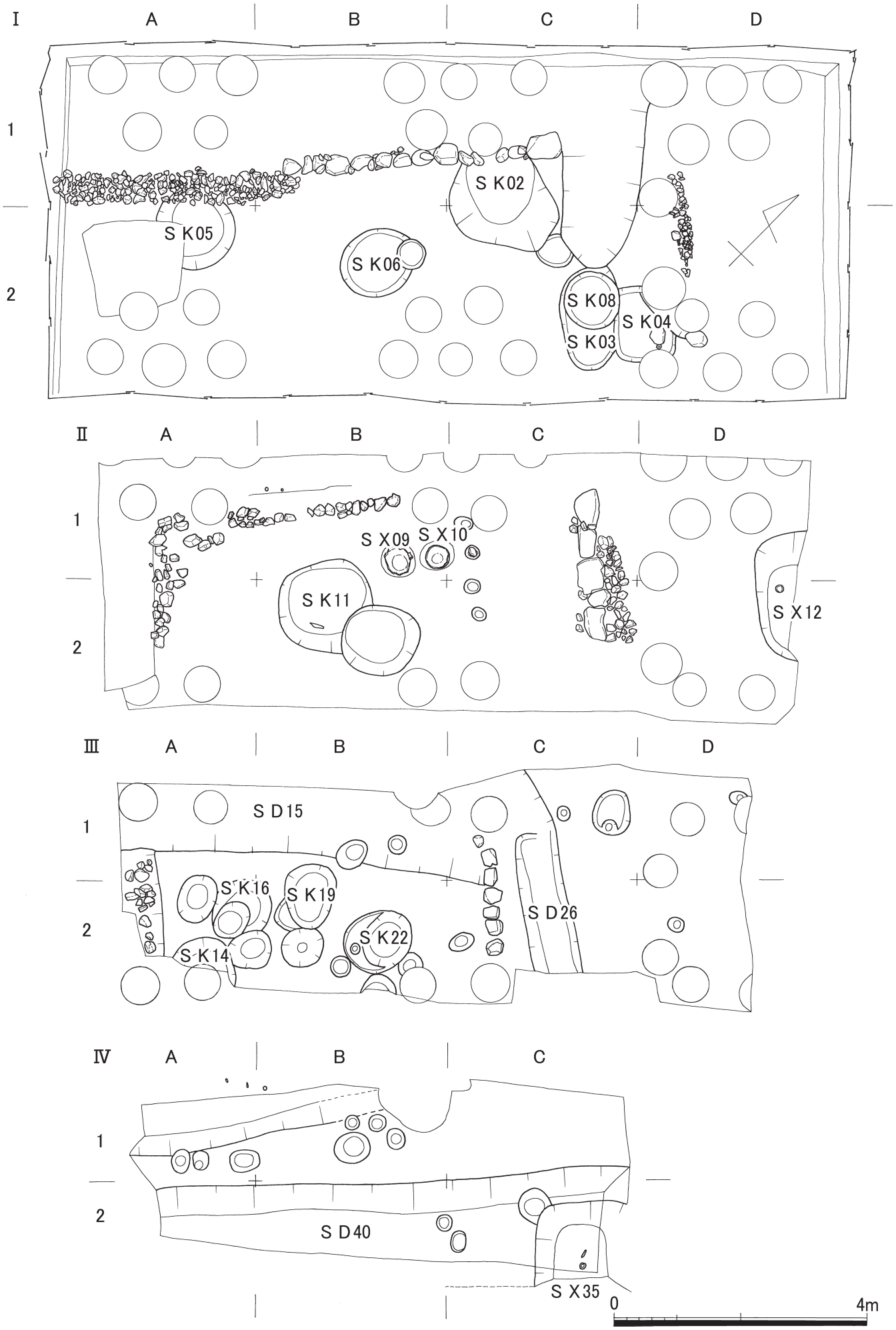


第２図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺 1/10000）

第３図 博多遺跡群第 73 次調査発掘地（縮尺 1/1000）

遺跡名	次数	調査番号	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	報告書	調査原因
博多遺跡群	a	7725	御供所町	1,412.0	1977.12. 7 ～ 1978.11. 2	105･126	地下鉄
博多遺跡群	1	7810	御供所町	360.0	1978.11.20 ～ 1979. 1.18	543	寺院
博多遺跡群	b	7833	御供所町他	4,500.0	1979. 3 ～ 1979.12.20	156･193	地下鉄
博多遺跡群	8	8024	御供所町	600.0	1980. 8. 1 ～ 1980.10.28	543	寺院
博多遺跡群	11	8027	御供所町３－30				ビル
博多遺跡群	f	8038	御供所町、冷泉町	435.0	1981.10.12 ～ 1981.12.25	105	地下鉄
博多遺跡群	g	8148	御供所町	70.0	1981. 9. 1 ～ 1981.12.25	193	地下鉄
博多遺跡群	h	8149	御供所町、祇園町	184.0	1981.10.12 ～ 1981.12. 6	193	地下鉄
博多遺跡群	28	8508	御供所町 70 － 2	1800.0	1985. 5.20 ～ 1985. 8.31	147	ビル
博多遺跡群	n	8527	御供所町	383.0	1985.12.27 ～ 1986. 6.30	205	道路
博多遺跡群	30	8605	御供所町 36 他	495.0	1986. 5. 8 ～ 1986. 7. 7	149	ビル
博多遺跡群	31	8653	御供所町 65 他	190.0	1986. 5.26 ～ 1986. 7.10	150	ビル
博多遺跡群	35	8915	御供所町 830	420.0	1986. 1. 7 ～ 1987. 2.10	221	道路
博多遺跡群	48	8915	御供所町 40 他	263.0	1989. 5.16 ～ 1989. 8. 1	282	共同住宅
博多遺跡群	62	8963	御供所町 195 他		1989.12.18 ～ 1991. 2.28	397	ビル
博多遺跡群	66	9022	御供所町 129 － 1 他	444.0	1990. 7. 9 ～ 1990. 9.29	330	ビル
博多遺跡群	71	9111	御供所町 235 － 1	600.0	1991. 5.15 ～ 1991.10. 5	450	ビル
博多遺跡群	73	9120	御供所町 15	76.0	1991. 8. 6 ～ 1991. 9.16	本報告	事務所
博多遺跡群	88	9444	御供所町 311 － 313 他	255.0	1994.10. 1 ～ 1995. 3.14		自宅兼共同住宅
博多遺跡群	94	9551	御供所町 19 － 2 他	567.0	1996. 2. 6 ～ 1996. 7. 4	593	寺院
博多遺跡群	106	9777	御供所町５－ 20	48.0	1998. 3.13 ～ 1998. 3.26	593	共同住宅
博多遺跡群	107	9778	御供所町地内	120.0	1998. 3.18 ～ 1998. 5.29	706	道路
博多遺跡群	130	102	御供所町３－ 17	42.0	2001. 4. 9 ～ 2001. 4.27	762	個人住宅
博多遺跡群	145	342	御供所町 313 － 2	254.0	2003. 9. 3 ～ 2003.12. 5	851	共同住宅
博多遺跡群	177	730	御供所町 173 番、155 番 11	6.5	2007. 8.20 ～ 2007. 8.21		個人住宅
博多遺跡群	183	815	御供所町２－４	153.4	2008. 6. 9 ～ 2008. 6.23	1088	寺院
博多遺跡群	190	935	御供所町６番	56.0	2010. 2.15 ～ 2010. 3. 4	1129	寺院
博多遺跡群	194	1221	御供所町１－１	394.0	2012.10. 9 ～ 2013. 3. 8		学校
博多遺跡群	196	1313	御供所町８番１号	1600.0	2013. 7. 1 ～ 2013.10.24		校舎解体

第１表　博多遺跡群 御供所町周辺 発掘調査一覧表



第４図 博多遺跡群第 73 次調査遺構配置図（縮尺 1/80）

Ⅲ 調査の記録

１　調査の概要

調査地は博多遺跡群の陸地側砂丘博多浜中央部東南、聖福寺境内の南側に位置する。地山の砂層の標高は約 2.1m、その上に約 2.4m の遺物包含層が堆積している。

確認、検出された層位、遺構について述べると、１～２層は灰褐色土～灰色土を主とし、焼土や炭化物を含んでいる。掘り下げ時に検出した遺構の時期は 13 世紀後半～ 14 世紀前半とみられ、N-35°-W に方位を取る矩形の石列、土坑を検出した。３層は黒色砂～黒褐色砂を主とし、上面で検出した遺構は上層と時期差はみられず、一連のものである可能性がある。上面で検出の石列と同一の方位を取る矩形の石列・柱列、土坑、埋甕を検出した。３層は 12 世紀後半～ 13 世紀前半とみられ、下面でピット状遺構、埋土に焼土を多量に含む土坑、杭列、土留め板が伴う溝を検出した。３層からは多量の中国系瓦が出土している。４層は灰褐色～灰黒色砂を主とし、時期は 11 世紀後半～ 12 世紀前半とみられる。下面の黄白色砂層（地山）で上面検出の石列と同じ方位の溝を検出した。

２　遺構と遺物

以下検出した遺構と出土した遺物について報告する。調査区は北東から南西にかけての長軸方向で二分し、西側を１、東側を２、南西辺から３m 毎に A･B･C･D と区分けし、数字とアルファベットの組み合わせでグリットを示す。遺物包含層出土遺物はグリット毎に取り上げた。

検出遺構（第６図）

土坑　ＳＫ０５　A-2 グリット（以下省略）で１層掘り下げ時に検出した直径 1.3m、深さ 0.35m の不整円形の土坑で、土師器小皿・杯が大量に出土した。

土坑　ＳＫ０６　B-2 で１層掘り下げ時に検出した直径 1.2m、深さ 0.2m の不整円形の土坑で、土師器小皿・杯が大量に出土した。

埋甕　ＳＸ０９　２層上面（B-1）で検出した。直径 0.6m、深さ（検出時）0.2m の不整円形の土坑に陶器甕を据えている。

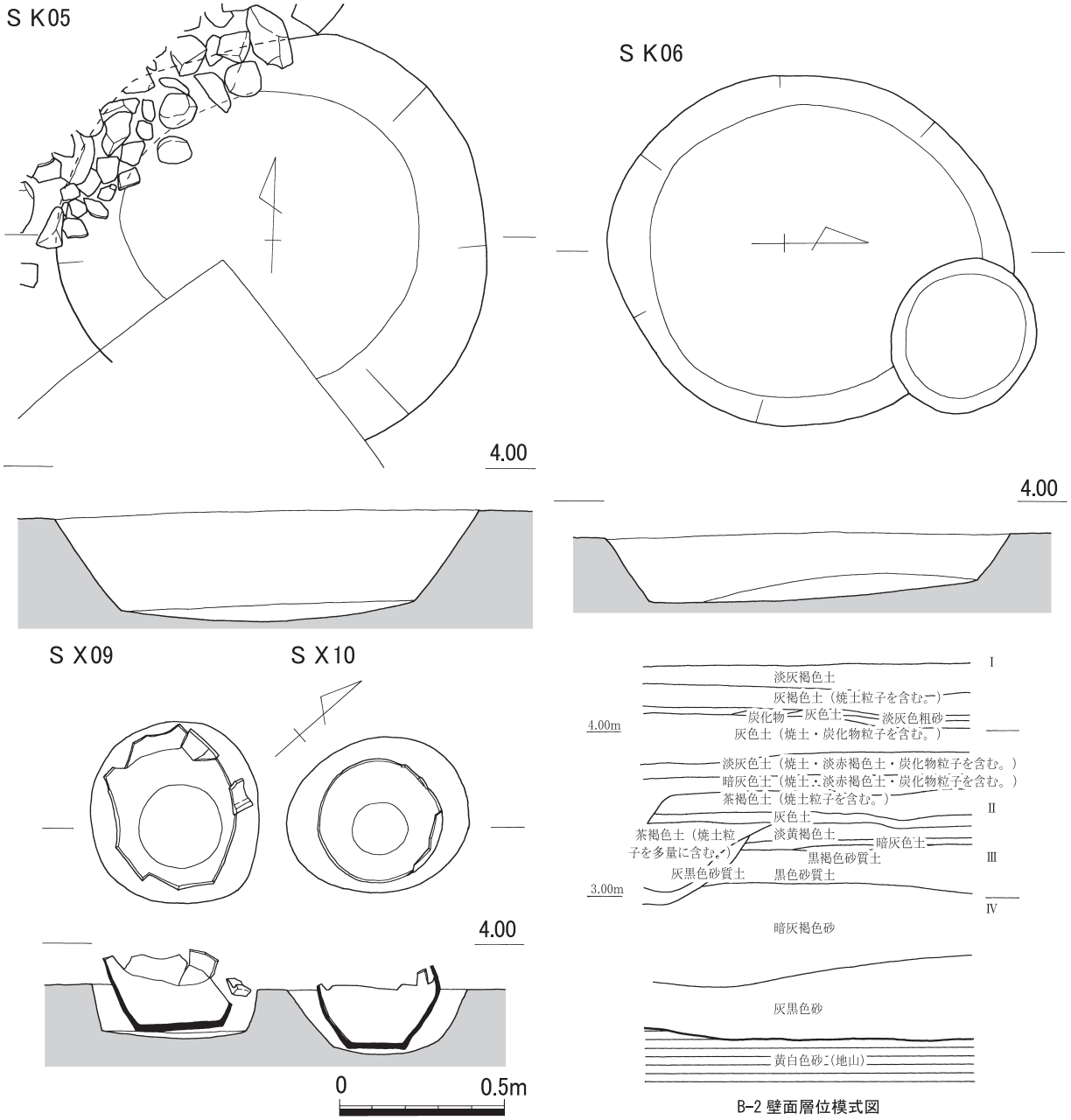
埋甕　ＳＸ１０　２層上面（B-1）で検出した。直径 0.5m、深さ 0.2m（検出時）の不整円形の土坑に陶器甕を据えている。

土壙墓　ＳＸ１２　３層上面（D-1/2）調査区の北端で検出した全長 2.0m、検出幅 1.0m、深さ 0.4m の隅丸方形の土坑で､完形の土師器杯が底面より 10cm 浮いた状態で出土した。土壙墓の可能性がある。

土壙墓　ＳＸ３５　４層上面（C-2）上面、調査区の北東端で検出した隅丸方形の土坑で、全体の規模は不明、深さ 0.45m を測る。完形の白磁皿が底面より 10cm 浮いた状態で出土した。土壙墓の可能性がある。

溝　ＳＤ１５　４層上面（A/B-1)、調査区の北西で検出した西側への落ち込みで、方位は N-60°-E に取る。深さは最大で 0.8m を測る。

溝　ＳＤ４０　４層上面（A~C-2)、調査区の南東で検出した落ち込みで、方位は N-45°-E に取る。検出した長さ 7.5m、最大幅 2.2m、深さは最大で 1.0m を測る。



第５図 個別遺構実測図（1）（縮尺 1/20）

出土遺物

ＳＫ０５出土遺物（第７図）

土師器　底部は糸切り離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（１～23）口径 7.9 ～ 9.0cm、器高 1.1 ～ 1.4cm、底径 5.4 ～ 7.9cm を測る。

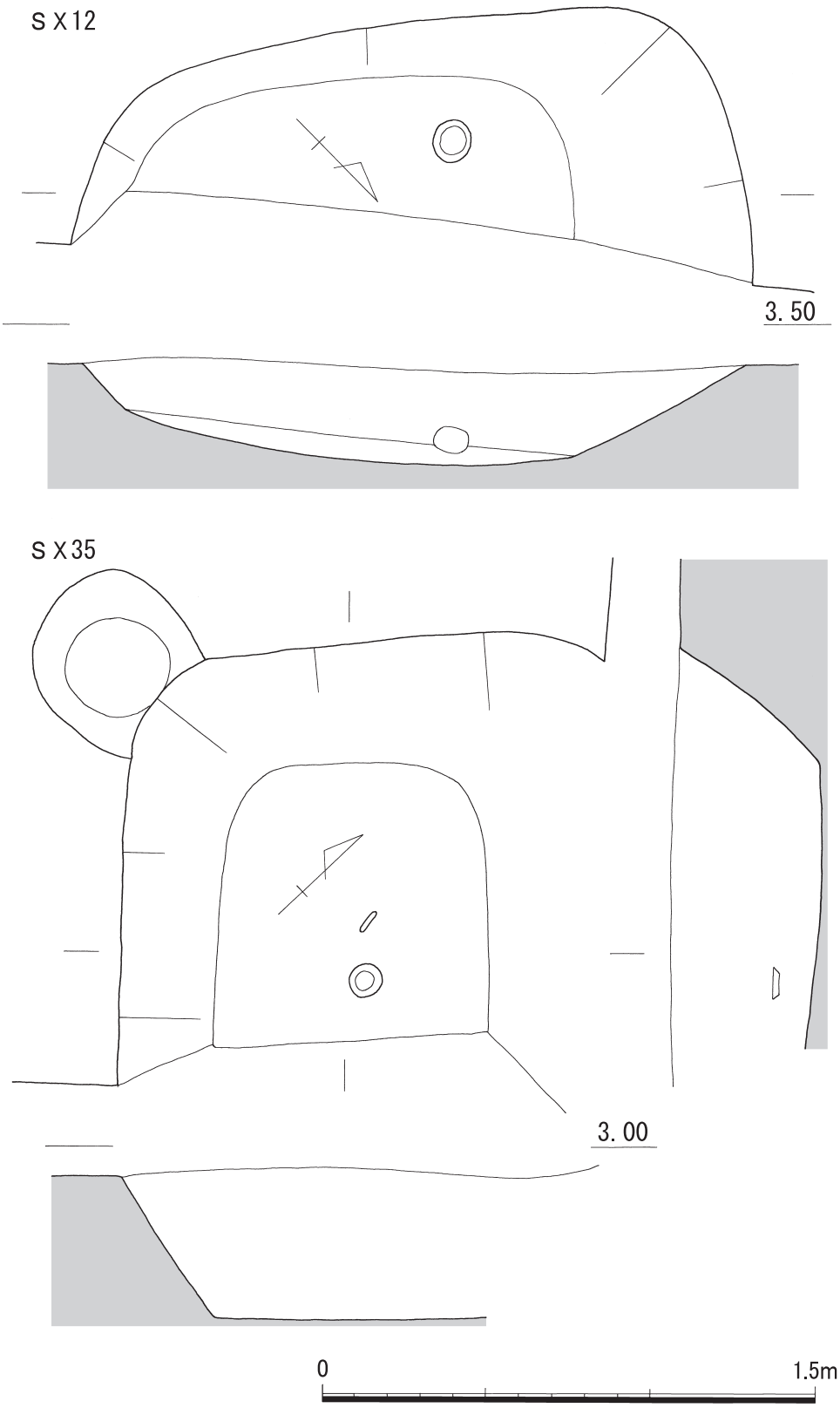
杯（24 ～ 40）口径 12.0 ～ 13.9cm、器高 2.2 ～ 3.1cm、底径 7.4 ～ 9.0cm を測る。

ＳＫ０６出土遺物（第７・８図）

土師器　底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（41 ～ 60）口径 7.4 ～ 8.8cm、器高 1.0 ～ 1.4cm、底径 4.9 ～ 6.7cm を測る。

杯（61 ～ 70）口径 12.2 ～ 12.9cm、器高 2.5 ～ 2.9cm、底径 7.5 ～ 9.0cm を測る。



第６図 個別遺構実測図（2）（縮尺 1/20）

包含層出土土器（第８図）

土師器　底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（71 ～ 82）口径 6.8 ～ 9.2cm、器高 1.0 ～ 1.5cm、底径 4.9 ～ 7.7cm を測る。

杯（83 ～ 95）口径 11.3 ～ 13.0cm、器高 2.2 ～ 2.9cm、底径 7.7 ～ 9.3cm を測る。

鍋（96）復元口径 28.5cm の鍔付の鍋で、体部外面中位に剥離した脚の痕跡がみられる。口縁部から体部にかけては内外面とも刷毛目、口縁部外面はその後横ナデ、口縁端部と鍔部は横ナデ調整である。外面には煤が付着している。胎土はにぶい黄橙色を呈し、粗い砂粒を多量に含む。SD15（B-1）出土。

土錘（97）全長 3.3cm、径 0.9cm の紡錘形土錘で、１層（SB01 北側）出土。

ＳＸ１２出土遺物　土師器　杯（1）底部は糸切り離し、体部から内底まで横ナデを施す。口径 12.0cm、器高 3.1cm、底径 5.5cm を測る。

包含層２層（C-2）出土土器　土師器　小皿（2）底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデを施し、内面の体部と底部の境には明瞭に稜がつく。外底には板状圧痕がみられる。口径 12.0cm、器高 3.1cm、底径 5.5cm を測る。

ＳＤ４０（B-2）出土土器　土師器 椀（3）厚手の作りの椀で、体部内湾して外上方にのび、口縁端部は外が直に、上面は平坦になす。復元口径 15.7cm、器高 5.2cm、高台径 6.0cm を測る。

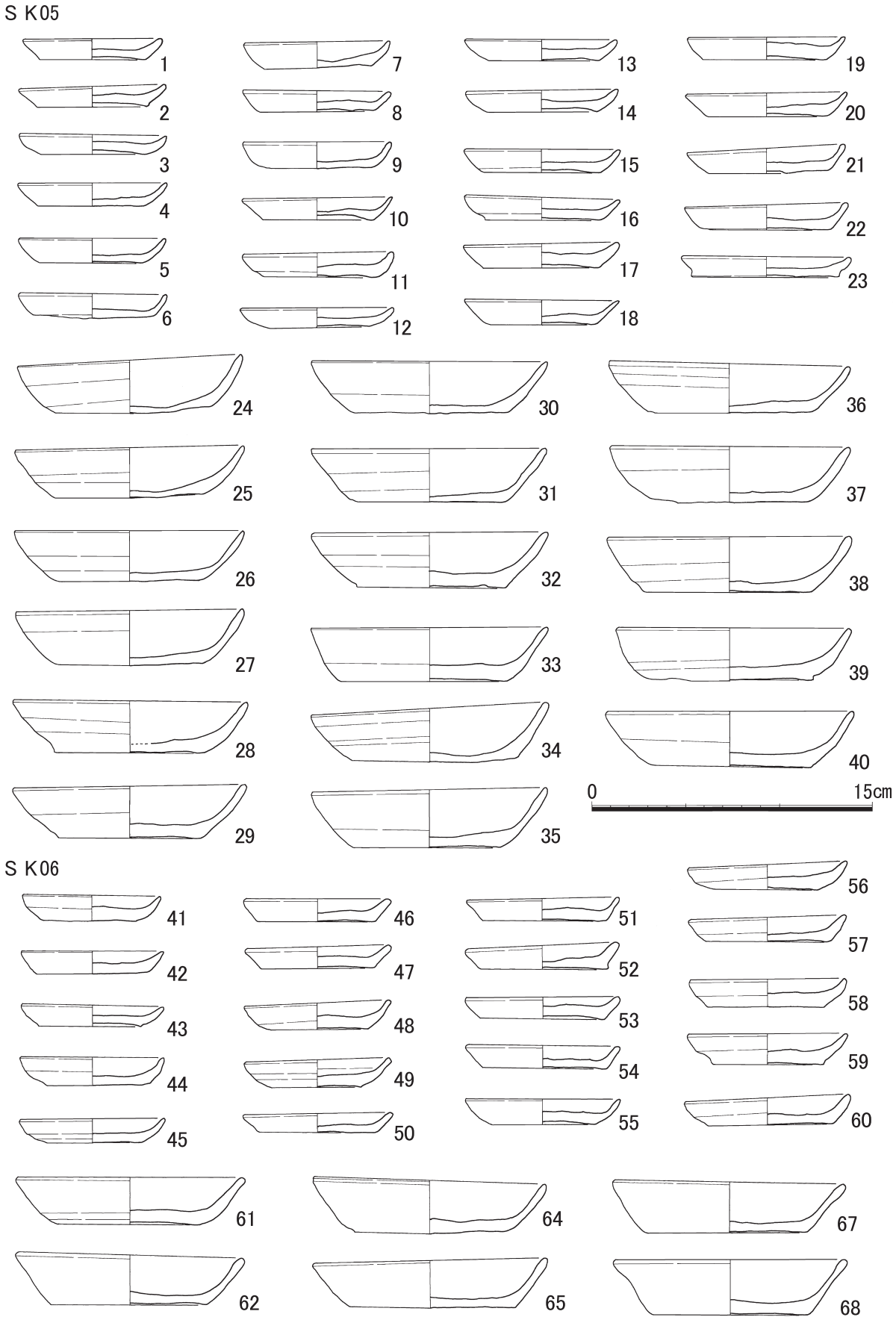
陶磁器　陶磁器については、異なる遺構・層位から出土した破片資料が接合する例が多くみられたことより、形態分類に沿って述べ、文末に出土遺構・層位を記す。

白磁（第９・10 図）

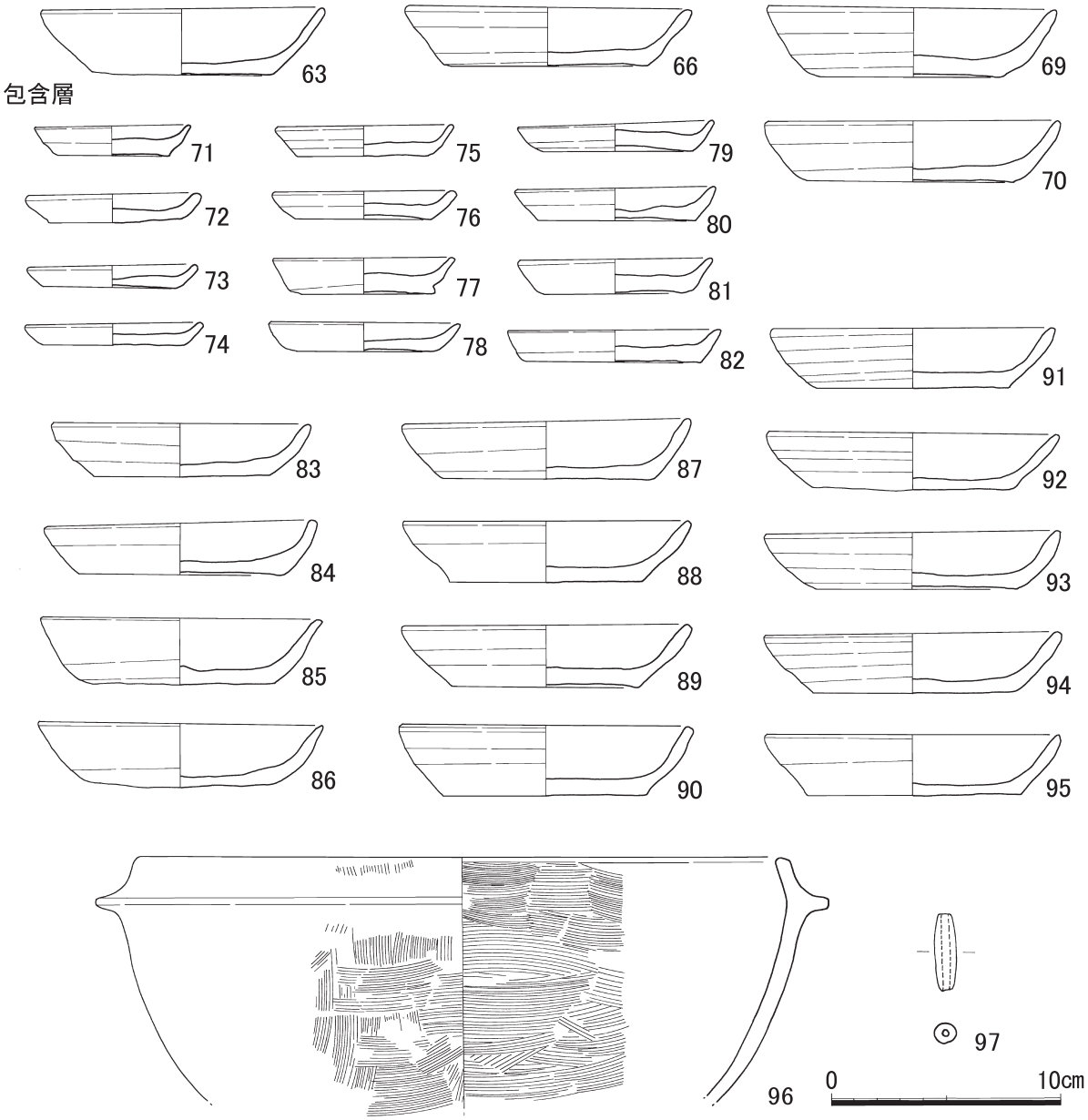
碗（15 ～ 18）　15 は口縁端部の釉を剥ぎ取った碗Ⅸで、底部は欠失している。２層（C-2）出土。16･17 は薄手の作りのやや浅めの碗で、体部はゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁部は直線的にのび、口縁端部は細くおさめられている。高台は外面を直、内面を斜めに浅く削り出す。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。透明な釉が体部外面下半までかけられ、二次的な被熱により光沢は鈍くなっている。16 は復元口径 14.4cm、器高 5.6cm、高台径 4.2cm を測る。１層（A/B-1）出土。17 は復元口径 15.4cm、器高 5.5cm、高台径 4.0cm を測る。SB01 上面、１層（B-1/2）出土。18 は体部が直線的に外上方にのび、口縁端部は外に摘み出され、上面は平坦となし、釉が剥ぎ取られる。内面の口縁下と体部と底部の境に沈圏線をめぐらす。高台は内外とも面取りされる。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に、透明釉が体部外面下半までかけられ、二次被熱により光沢は鈍い。復元口径 16.0cm、器高 6.9cm、高台径 7.8cm を測る。SB01・１層（A/B-1）出土。

皿（４～ 14）４～ 13 は口禿の皿で、４～ 6 は口径 10.0 ～ 10.2cm、器高 1.5 ～ 2.0cm、底径 6.5 ～ 7.4cm を測る浅型の皿で、４・６は全面に施釉される皿Ⅸ -1、5 は体部外面下半まで施釉される皿Ⅸ -2 に分類される。４が SK11、５が SX35、６は２層（B-2）出土である。７・８は体部外面下半が露胎の皿Ⅸ -2 で、7 は口縁部が大きく外反する。口径 10.1cm、器高 2.4cm、底径 5.5cm を測る。３層（A-1）出土。８は口縁部が直線的にのび、口径 9.6cm、器高 2.7cm、底径 5.1cm を測る。SK04 出土。９～ 12 は全面施釉皿Ⅸ -1 の口径 10.1 ～ 10.6cm、器高 2.7 ～ 3.4cm、底径 5.1 ～ 6.1cm を測る中型品で、口縁部は９が直線的、10 ～ 12 は外反する。9 が SD15（B-1）・２層（C-1）、10 が２層（C-1）、11 が１層（C-2）、12 が３層（A-1）、13 が２層（C-2）出土である。14 は体部中位で屈曲するが、内面は体部と底部の境が不明瞭である。焼成・釉の発色ともに不良で、浅黄橙色の胎土に明緑灰色の釉が体部外面下半までかかる。口径 9.7cm、器高 2.8cm、底径 3.6cm を測る。２層（B-1）出土。

水注 蓋（20・21）傘型の天井部に筒状の身受けの返りを付ける。天井部の外面は型造りによって八弁花を模る。縁に紐掛け環があることから水注の蓋と見做される。身受け返りの端部は平坦となす。



第７図 出土土器実測図（１）（縮尺 1/3）



第８図 出土土器実測図（２）（縮尺 1/3）

灰白色の胎土に、透明釉が天井部外面までかけられる。口径 3.8cm、器高 1.7 ～ 1.9cm、返り径 1.9cm を測る。20 が 1 層（A-1）、21 は完形で 2 層（B-1）出土。

水注（28・29）28 は肩部より下が欠失し、頸部に把手と縦位の耳の基部が残る。灰白色の胎土に、明オリーブ灰色透明の釉がかけられる。復元口径 8.8cm を測る。1 層（A-1/2）出土。29 は口縁部が欠失し、肩部に注口と把手の基部が残る。高台は内外とも面取りされる。胴部外面に鉄絵で簡略化した花卉文が描かれている。灰白色の胎土に、明オリーブ灰色透明の釉が高台外までかけられる。胴部最大径 17.2cm、高台径 7.4cm を測る。1 層（C-1）・2 層（C-2）出土。

壺 蓋（22） 凹部が外面、凸部が内面となる完形の落し蓋で、灰白色の胎土に、灰白色透明の釉が天井部外面までかけられる。口径 5.8cm、器高 1.4cm を測る。SB01 東側包含層出土。

青白磁（第 10 図）

小碗（19）薄手の作りの碗で、体部はゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部は直線的にのび、端部は鋭く断面四角におさめられている。高台は断面台形に削り出される。灰白色の胎土に、明青灰色の

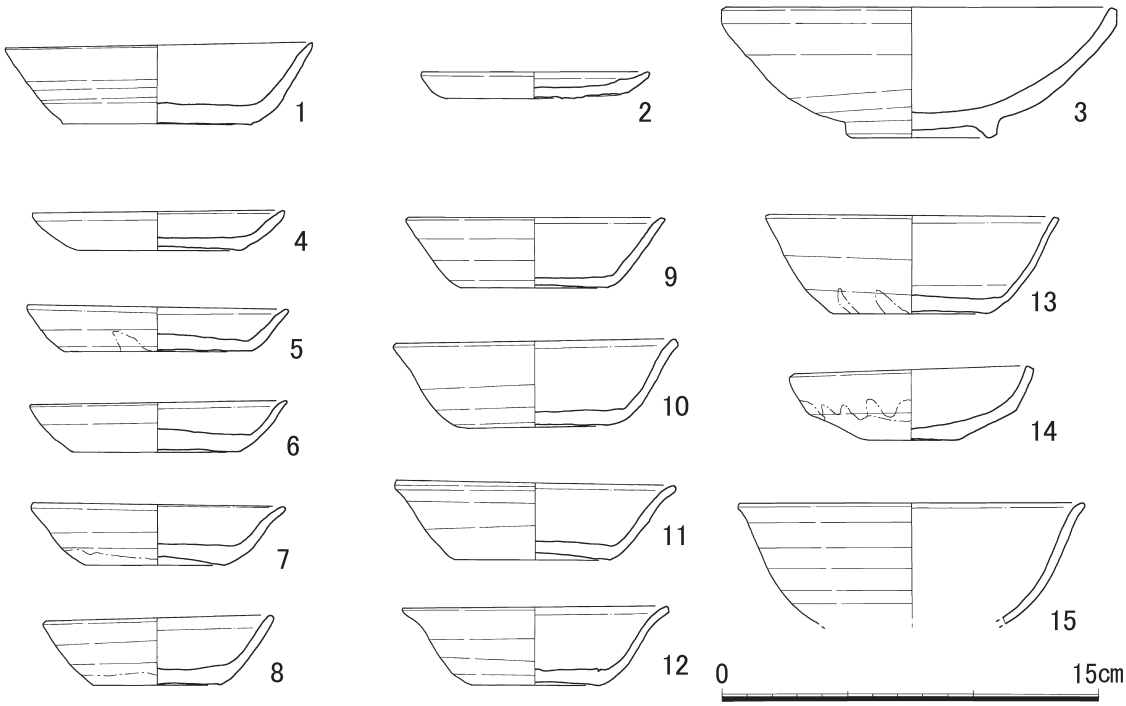
透明な釉が全面にかけられ、口縁端部の釉を剥ぎ取る。釉は細かい気泡が入る。口径9.6cm、器高3.8cm、高台径3.0cmを測る。１層（B-2）出土。

合子（24～27）24は細めの蓮弁を型造りによって体部外面に配する。白色の胎土に、灰白色透明の釉が蓋受け部および体部下位、底部を除いた部分にかけられている。復元口径5.8cm、受け部径6.8cm、器高2.3cm、底径5.2cmを測る。SD15（C-1）出土。25は無文の扁平な身で、灰白色の胎土に、灰白色透明の釉がかけられ、蓋受け部および体部下位、底部は露胎である。復元口径7.6cm、受け部径8.5cm、器高1.3cm、底径7.8cmを測る。１層(D-2)出土。26は体部外面に片切彫りで沈線を入れる。灰白色の胎土に、明オリーブ灰色透明の釉がかけられ、蓋受け部および体部下位は露胎である。口径8.4cm、受け部径10.2cmを測る。SK11・１層(B-2)出土。27は型造りで唐草文を体部外面にめぐらす。白色の胎土に、灰色透明の釉がかけられ、蓋受け部および体部下位は露胎である。口径7.8cm、受け部径9.2cmを測る。１層（C-1）出土。

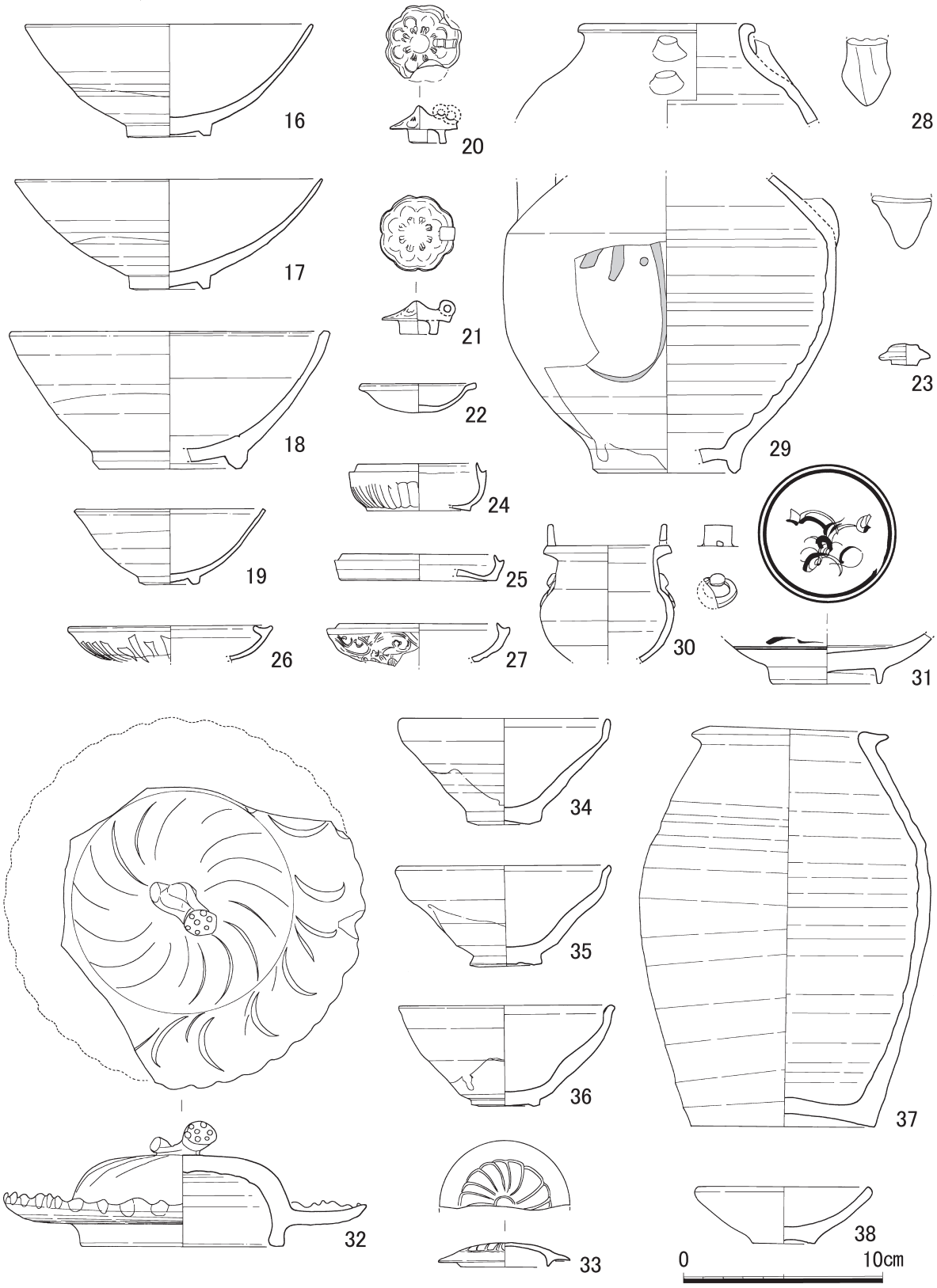
香炉（30）鼎形の香炉で、口縁部は短く直に折れ、上面に方形の把手が付く。頸部と肩部の境に不遊環が付く。灰白色の胎土に、灰白色透明の釉が口縁部内面から外面全体にかけてかけられる。口径6.4cm、復元胴部最大径6.7cmを測る。２層（B-2・C-1）出土。

小壺 蓋（23・33）23は完形で、天井部が平坦な栓形の蓋である。灰白色の胎土に、灰オリーブ色の釉がかけられ、内面は露胎である。口径2.6cm、器高2.1cm、挿入部径1.3cmを測る。２層（A-1）出土。33は型造りで花弁文を天井部外面に施す。黒色微粒子を含む灰白色の胎土に、灰白色の釉が外面にかけられる。釉は細かい気泡が立っている。口径6.6cm、器高1.2cm、受け部径4.2cmを測る。試掘トレンチ出土。

酒会壺 蓋（32）荷葉を模った酒会壺の蓋で、中心から片切彫による連続する弧状の刻線を放射状に配することによって葉脈を表現している。中央の撮みとなる茎の切り口には孔が線彫りされている。1/3残る口縁は押圧により波状を呈する。身受けの返りは筒状で、端部は平坦となす。胎土は灰白色を呈し、淡黄色の釉が内面と外面は口縁部下までかけられ、貫入が入る。露胎の口縁部下に墨痕がみえるが、判読不能。復元口径18.3cm、器高6.3cm、返り径10.2cmを測る。SD15（B-1）出土。



第９図 出土陶磁器実測図（１）（縮尺1/3）



第 10 図 出土陶磁器実測図（2）（縮尺 1/3）

青花 碗（31）底部片で、内底見込みに二重の圏線内に花文を描く。外面の体部と底部の境にも二十の圏線をめぐらせ、その上部に一部文様の断片がみられる。白色の胎土に、無色透明の釉がかけられ、細めの断面台形の高台先端の釉をカキ取り露胎とする。高台径 5.6cm を測る。SD15（B-1）出土。

黒釉陶器（第 10 図）

碗(34 ～ 36)34 は直線的に開く体部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、端部内面はややくぼませる。高台は外面を直に、内面を斜めに浅く削り出す。胎土は明褐灰色を呈し、漆黒色の釉が体部外面下半までかけられ、口縁部の釉は褐色を呈する。復元口径 10.6cm、器高 5.3cm、復元高台径 3.7cm を測る。１層（B-1）出土。35 は直線的に開く体部から口縁部が外反して立ち上がり、端部はさらに外に開き内面はややくぼませる。体部最下位の屈曲部外面はヘラ削りにより鋭く稜線が入る。高台は外面を裾開き気味に削り出し、内面の刳りは極めて浅い。胎土はにぶい黄橙色を呈し、青黒色の釉が体部外面下半までかけられ、釉の表面にはピンホールがみられる。口縁部の釉は褐色を呈する。口径 10.8cm、器高 5.0cm、復元高台径 3.6cm を測る。SD15（A-1）出土。36 は直線的に開く体部から口縁部が外反して立ち上がり、端部はわずかに外に引き出し、内面をややくぼませる。体部中位が屈曲し、肥厚している。外面の高台のすぐ上の屈曲部はヘラ削りにより鋭く稜線が入る。高台は外面を直に、内面を浅く斜めに削り出す。胎土は紫灰色を呈し、紫黒色～にぶい赤褐色の釉が体部外面下半までかかり、表面にはピンホールがみられる。復元口径 10.8cm、器高 5.0cm、高台径 3.4cm を測る。撹乱から出土。

壺（37）口径 9.9cm、器高 19.9cm、胴部最大径 14.6cm、底径 9.2cm を測る樽形の壺で、緑黒色の釉を全面にかけた後、口縁端部上面の釉を拭き取る。ピンホールがみられる。口縁端部は断面三角形を呈し、直線状に延びる頸部と胴部の境には１条の凹線を巡らす。内面から胴部上半にかけて回転横ナデ、胴部下半は回転ヘラ削り調整で、胴部はロクロ目が著しい。胎土は精良で、暗灰色を呈する。韓国新安沖沈船引揚げ資料、大宰府史跡第 107 次調査（推定金光寺跡）出土蔵骨器（SG3140-170）と酷似している。１層（SB01 東側）出土。

陶器（第 10 図）

小皿(38)上げ底の底部からわずかに内湾した口縁部がほぼ直線的にのびる。口縁端部は丸みをもち、外傾する。胎土はにぶい黄褐色を呈し、暗褐色の釉がかけられている。口径 8.9cm、器高 2.8cm、底径 3.1cm を測る。１層（C-1）出土。

青磁（第 11・12 図）67・73 以外は龍泉窯系青磁である。

碗（39）器全体を五弁花に見立てた碗 I-4 類で、胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。灰オリーブ色の釉が高台外面までかかる。見込みに「金玉満堂」を刻印する。SD15、２層（A-1）出土。

浅形碗（40）碗 I-4 類と同じ文様構成をとる。底部は欠失している。胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。灰オリーブ色透明の釉がかけられ、貫入が入る。SD15、２層（B-1）出土。

無文碗（41）腰が張らず、蓮弁文碗と同じ外形である。胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉がかけられ、貫入が著しい。復元口径 13.5cm、器高 5.0cm、高台径 4.1cm を測る。試掘トレンチ出土。

無文小碗（42）無文劃花文碗を小型化した小碗Ⅰ -1 で、外形は相似形をなす。胎土は灰色を呈し、灰オリーブ色の釉が掛けられるが、発色は不良である。復元口径 10.2cm、器高 4.3cm、高台径 3.9cm を測る。２層（C-1）出土。

厚く施釉され、断面三角形（細めの台形）の高台先端の釉をカキ取り露胎とし、蓮弁文や高台の削りが鋭い大宰府分類Ⅲ類を「砧青磁」型と見做す。註1

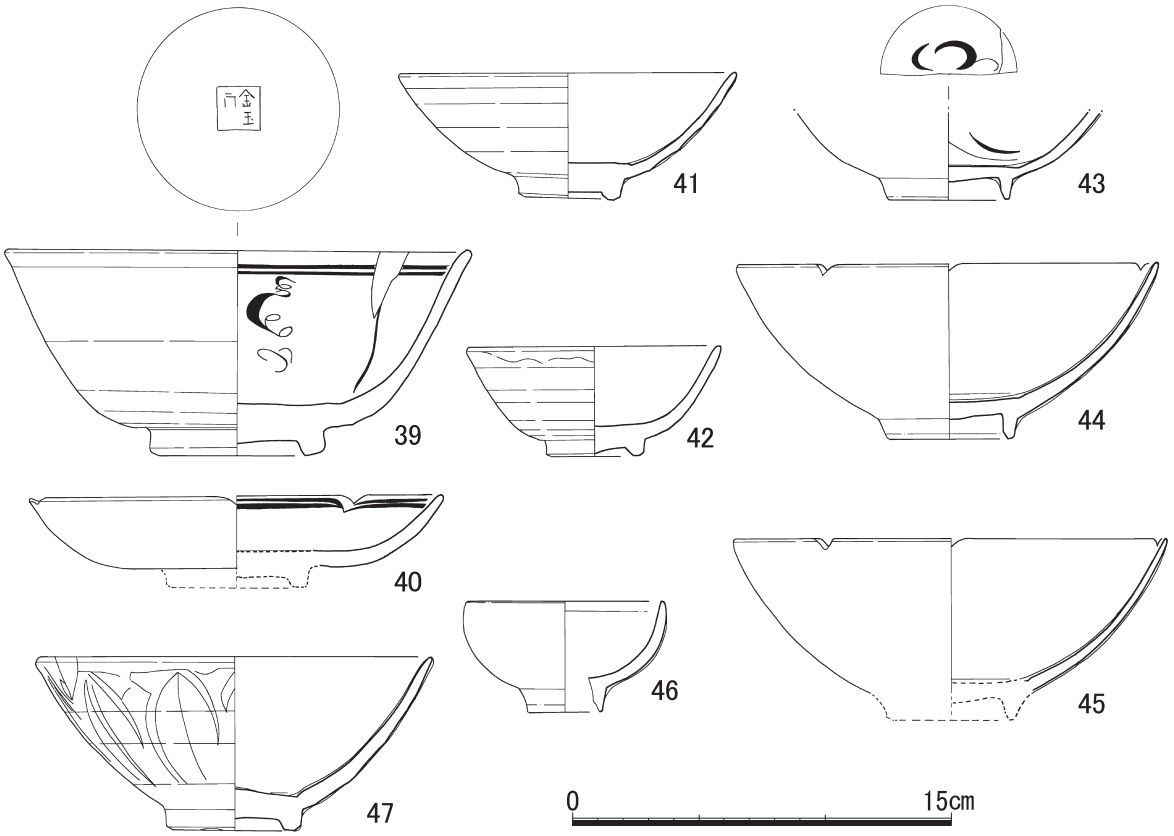
砧青磁形 劃花文碗（43）体部下半の破片資料で、内面は体部と見込みに片切彫による劃花文を施す。胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色透明の釉がかけられ、貫入が入る。１層（A-1）出土。

砧青磁形 無文碗（44・45）体部から口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁部に輪花を刻む。碗Ⅲ-1。胎土が灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉が高台先端を除き全面にかけられ（45 は底部欠失）、二次的な被熱によりただれている。44 は復元口径 16.8cm、器高 6.9cm、高台径 5.0cm を測り、1 層（A/b-1）出土。45 は復元口径 17.2cm を測り、1 層（B-1/2）出土。

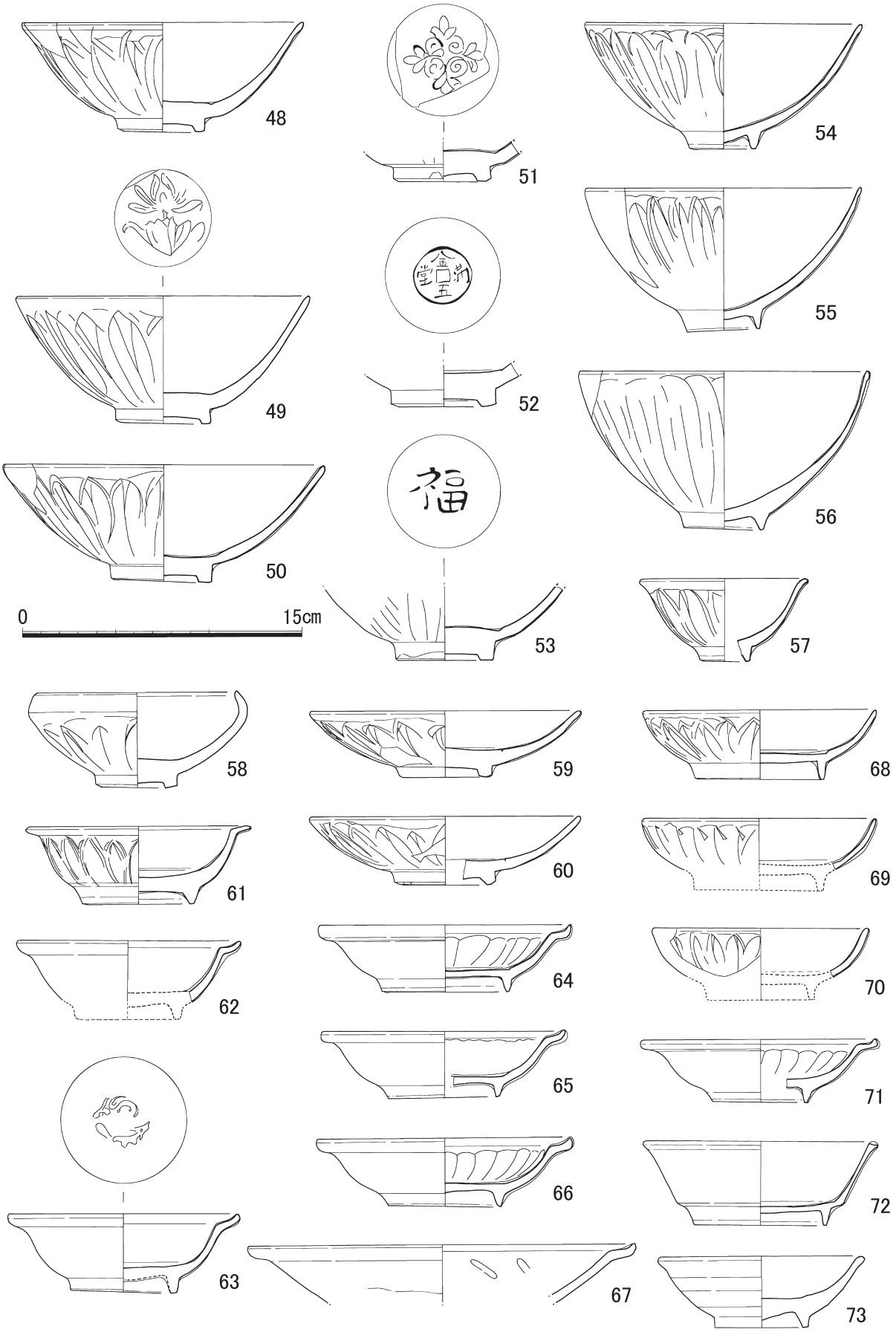
砧青磁形 無文小碗（46）体部から口縁部まで内湾し立ち上がる半球形の小碗Ⅲ-1a で、底部の中心は欠失している。釉が剥ぎ取られた口縁端部は細くおさめられている。灰白色の緻密な胎土に灰オリーブ色透明の釉がかかる。（復元）口径 7.8cm、器高 4.3cm、高台径 3.0cm を測り、1 層（B-1）出土。

断面四角形の高台畳付とその内側が露胎で、底部の肉厚の蓮弁文碗で、従来の大宰府分類でⅠ-5 から最新の分類ではⅡ類とされ、体部のふくらみや蓮弁の幅による時期差が指摘されるに及んで、中分類が設定されている。精製品の「砧青磁」型（大宰府分類Ⅲ類）に対する粗製品の一群である。

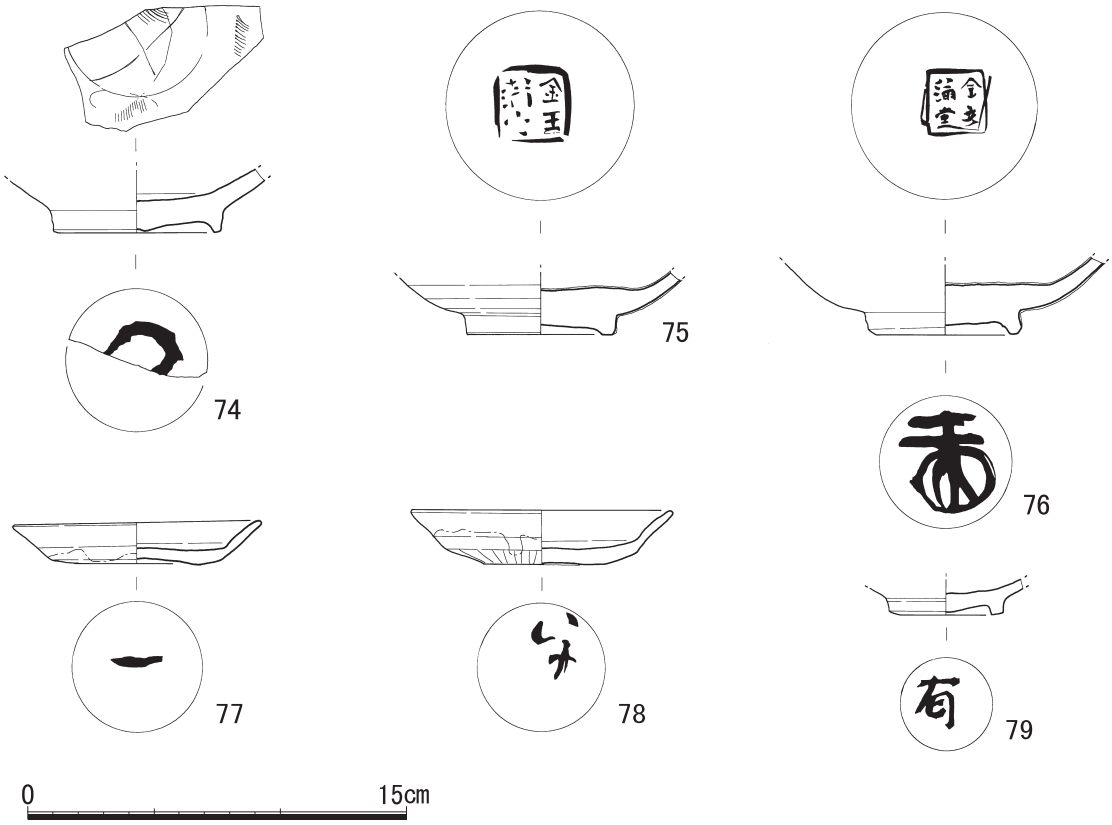
鎬蓮弁文碗（47 ～ 53）47 は蓮弁の幅が広く、間弁を除くと全体で 16 弁前後削り出されている碗Ⅱ-b である。胎土は灰白色を呈し、明オリーブ灰色の釉が掛けられる。復元口径 15.8cm、器高 6.9cm、高台径 5.5cm、高台幅は 0.8cm、体部最大厚 0.9cm を測る。2 層（C-2）出土。48 ～ 50 は蓮弁の幅が狭い碗Ⅱ-c である。48 は灰白色の緻密な胎土に灰オリーブ色透明の釉がかけられる。復元口径 15.0cm、器高 5.8cm、高台径 4.7cm、高台幅は 0.5cm、体部最大厚 0.7cm を測り、SK06 下層・1 層（B-2）出土。49 は内底見込みに印花で蓮華折枝文を施す。灰白色の胎土に灰オリーブ色透明の釉がかけられる。二次被熱の部位は灰色を呈している。口径 15.7cm、器高 6.8cm、高台径 5.1cm、高台幅は 0.5cm、体部最大厚 0.7cm を測る。1 層（C-1/2・D-2）出土。48・49 は蓮弁の幅が狭くなるとともに，高台幅・体部最大厚も減じている。50 は底部の厚さが 1.0cm と薄く、高台幅は 0.7cm だが、体部最大厚 0.55cm と薄手である。精製のⅢ類と粗製のⅡ類の間に位置するものであろうか。灰白色の胎土に灰オリーブ色



第 11 図 出土陶磁器実測図（3）（縮尺 1/3）



第 12 図 出土陶磁器実測図（4）（縮尺 1/3）



第 13 図 出土陶磁器実測図（５）（縮尺 1/3）

透明の釉がかけられる。復元口径 17.2cm、器高 6.8cm、高台径 5.4cm を測り、1 層（A-1･B-1/2）出土。

51 ～ 53 は内底見込みに文様や文字が施された碗底部片で、見込みに 51（試掘トレンチ出土）が団花文、52（SK11 出土）が銭形に「金玉満堂」、53 は「福」（２層 C-2 出土）を刻印している。

砧青磁形 鎬蓮弁文碗（54 ～ 56） 体部外面に幅が狭い蓮弁を削り出す碗Ⅲ -2c で、54 は胎土が灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。灰オリーブ色透明の釉がかけられ、貫入が入る。釉が良好・透明に発色しているため、蓮弁文の鋭い削り出しが明瞭に観察される。1/2 強の残存で、口径 14.8cm、器高 6.6cm、高台径 3.6cm を測る。SD15（B-1）・２層（C-1）出土。55 は胎土が灰白色を呈し、オリーブ灰色透明の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径 14.8cm、器高 7.6cm、高台径 3.8cm を測る。SK04・１層（B-1/2）２層（A-1/2）出土。56 は胎土が灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉がかけられ、細かい貫入が入る。口径 15.6cm、器高 8.4cm、高台径 4.4cm を測る。１層（B-1）出土。

砧青磁形 鎬蓮弁文端反小碗（57）体部外面に幅が狭い蓮弁を削り出す端反りの小碗Ⅲ -2c で、胎土は灰白色を呈し、黒色微粒子を含む。オリーブ灰色透明の釉がかけられ、細かい気泡が入る。復元口径 9.0cm、器高 4.4cm、高台径 2.7cm を測る。SD15（C-1）出土。

鎬蓮弁文鉄鉢形碗（58）束口碗Ⅱ -b でほぼ完形である。胎土は灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉が高台畳付までかかり、貫入が入る。口径 10.6cm、器高 5.1cm、高台径 4.4cm を測る。２層（C-1）出土。

鎬蓮弁文浅形碗（59･60）浅形碗Ⅱ -b で、灰白色の胎土に明オリーブ灰色透明の釉を畳付までかける。復元口径 14.5cm、器高 3.6cm、復元高台径 5.0・5.5cm を測る。59 は１層（A-1/2）・２層（B-1）、60 は１層（B-2）・２層（A-1）出土。

鐔状口縁蓮弁文杯（61）口縁部が鋭く開き、体部はゆるやかに内湾し立ち上がる杯Ⅲ -4 で、高台端部の幅が広い。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉がかけられ、細かい気泡が入る。復元口径 12.0cm、

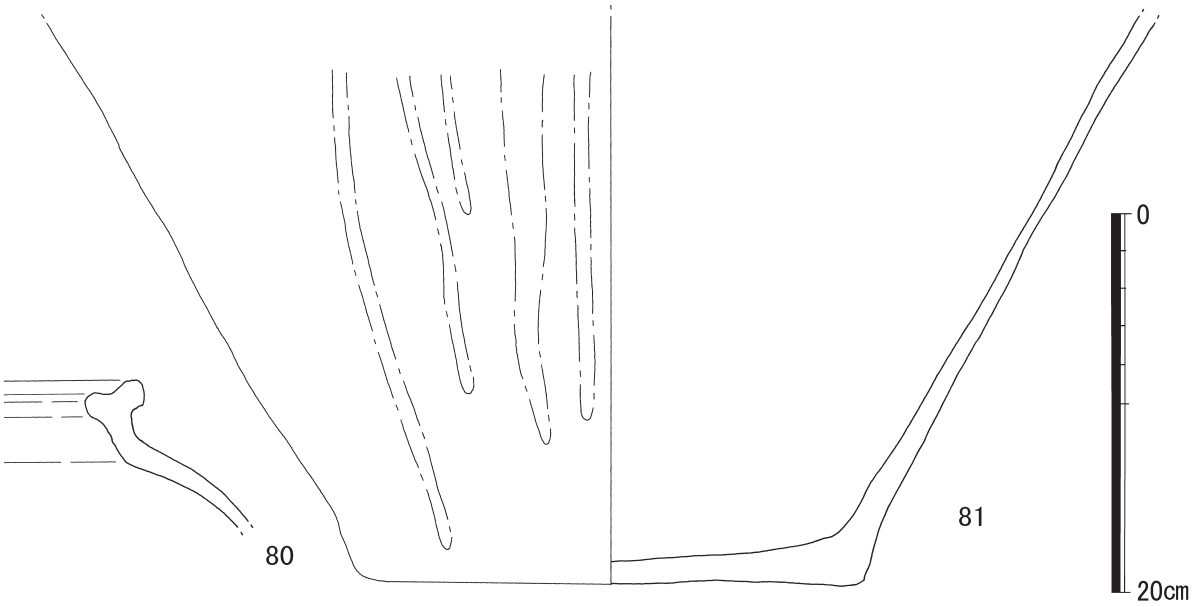
器高 4.2cm、復元高台径 9.9cm を測る。1 層（A-1）出土。

砧青磁形 鐔状口縁無文杯（62・63）体部内面が無文の杯Ⅲ -2 で、62 は底部が欠失している。灰白色の胎土に緑灰色の釉がかけられ、二次被熱によりただれている。復元口径 12.0cm を測る。1 層（B-1/2）出土。63 は見込みに双魚文を印刻する。高台端部の幅は広い。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径 12.4cm、器高 4.2cm、復元高台径 5.7cm を測る。1 層出土。

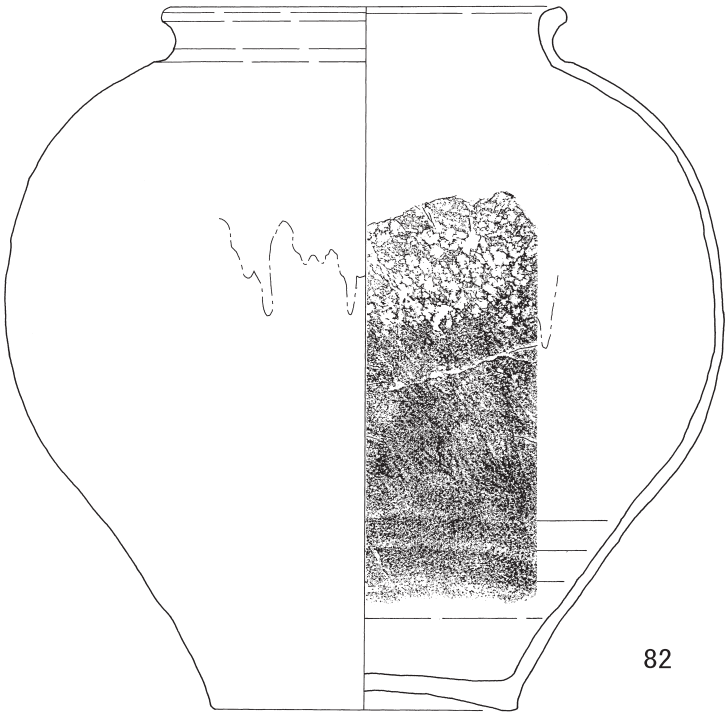
砧青磁形 鐔状口縁凹蓮弁文杯（64 ～ 66・71）体部内面に凹蓮弁を陰刻する杯Ⅲ -3b で、口縁部は鋭く内湾して開き、体部はゆるやかに内湾し立ち上がる。64 は黒色微粒子を含む灰白色の胎土に灰色の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径 13.6cm、器高 3.7cm、高台径 6.8cm を測る。3 層出土。65 は黒色微粒子を含む灰白色の胎土に明緑灰色の釉がかけられる。釉が厚く不透明なため体部内面の凹蓮弁は不明瞭である。口径 13.1cm、器高 3.7cm、高台径 5.9cm を測る。2 層（B-1）SB01 北側）出土。66 は灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉がかけられ、貫入が入る。口径 13.6cm、器高 3.7cm、高台径 5.8cm を測る。試掘トレンチ出土。71 は口縁端部を直上に引き出す。黒色微粒子を含む灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉がかけられる。口径 12.8cm、器高 3.3cm、高台径 5.0cm を測る。1 層（B-1）・2 層（A-2）出土。

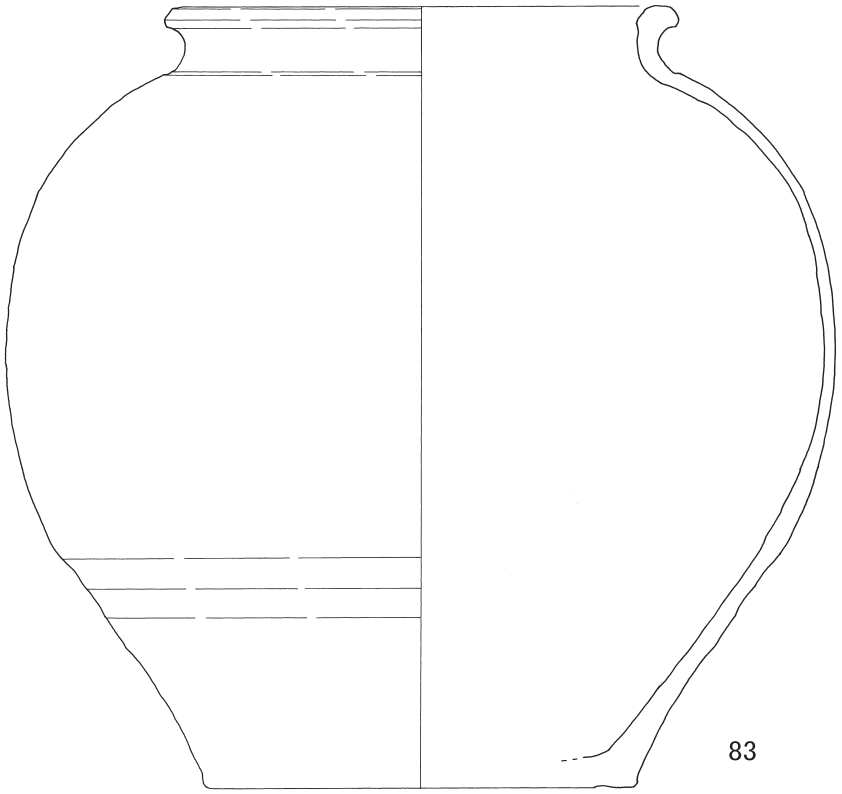
鐔状口縁盤（67）粗製の盤で、口縁端部を直上に引き出す。疎らな凹線で簡略化した蓮弁文を施す。灰白色の胎土にオリーブ灰色の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径 20.8cm を測る。SK02・SK06・SK11・1 層（A-2・B-1/2・C-2）・3 層（A-1）出土。

砧青磁形 鎬蓮弁文杯（68 ～ 70）皿形に近い杯Ⅲ -5b で、体部は体部から口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁端部は薄く収められている。68 は灰白色の胎土に灰オリーブ色透明の釉がかけられる。復元口径 12.5cm、器高 3.6cm、高台径 6.8cm を測る。2 層（A-1）出土。69・70 は底部が欠失している。69 は黒色微粒子を含む灰白色の胎土に緑灰色透明の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径 12.6cm を測る。1 層（A/B-2）出土。70 は灰白色の胎土にオリーブ灰色透明の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径 11.6cm を測る。1 層（B-2）出土。



第 14 図 出土陶磁器実測図（6）（縮尺 1/4）



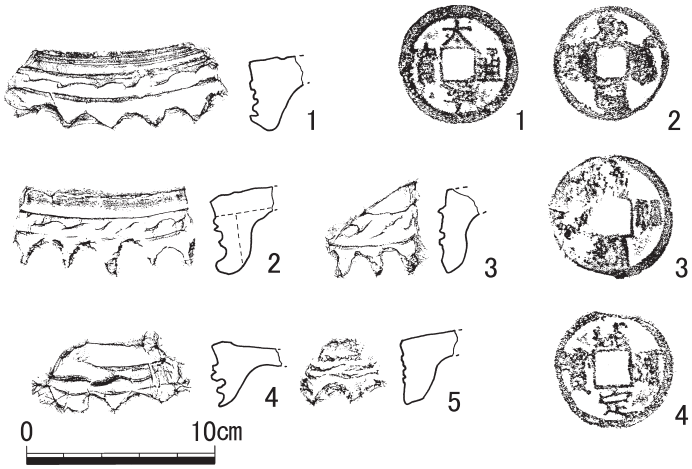


0　20cm

第 15 図 出土陶磁器実測図（7）（縮尺 1/4）

砧青磁形 腰折杯（72）無文の杯Ⅲ-1aで、底部と体部の境で屈曲し、明瞭に稜がつく。体部は直線的に外上方にのび、口縁端部は外に摘み出され、上面は平坦となす。底部の内側に高台を削り出す。黒色微粒子を含む灰白色の胎土にオリーブ灰色透明の釉がかけられ、貫入が入る。復元口径12.5cm、器高4.5cm、高台径7.0cmを測る。SB01・1層（B-1）出土。

杯（73）粗製の高麗青磁とみられる。灰色の胎土に灰オリーブ色透明の釉がかけられ、貫入が入る。口径11.1cm、器高3.8cm、高台径5.0cmを測る。SK19出土。



第16図 出土瓦実測図（縮尺1/4）銅銭拓影

墨書陶磁器（第13図）74は白磁碗Ⅵ-1b底部片で外底に墨書が記されているが、判読不明。SD15（B-1）出土。75・76は内底見込みに「金玉満堂」を刻印する青磁無文碗Ⅰ-1底部片で、76は外底に墨書が記されているが判読不明、2層C-2出土。77・78は無文の同安窯系青磁皿Ⅰ-1aで、外底に墨書が記されている。77が「一」、78は判読不明、いずれもSD15（B-1）出土。79は白磁皿底部片で、外底に墨書が記されているが判読不明。3層（B-1）出土。

陶器（第14・15図）甕（80～83）81は埋甕としてSX09土坑内に埋置されていた甕で、底面より30cmの残存高であった。径26.0cmの平底の底部から胴部下半が直線的に外上方にのびる。胎土は暗オリーブ灰色～オリーブ灰色を呈し、暗オリーブ灰色の釉が垂下している。甕内部に同一個体とみられる破片が落ち込んでいた。80は同一個体の口縁部片とみられる。82は埋甕としてSX10土坑内に埋置されていた甕で、底面より19cmの残存高であった。甕内部に落ち込んでいた破片から口縁部まで接合はできなかったが、図上で復元することができた。径16.0cmの上げ底の底部から胴部下半が外反して外上方にのびる。短く肥厚して開く口縁部の復元口径21.0cm、復元胴部最大径は38.0cmを測る。器高は37.0cm前後に復元される。胎土は暗赤色～暗赤褐色を呈し、暗接褐色～オリーブ灰色の釉が垂下している。83はSB01東側包含層1層から出土した破片資料を接合して復元した甕で、SX10甕と酷似した器形である。復元口径27.0cm、胴部最大径は44.0cm、器高を42.0cm、底径42.0cmを測り、一回り大きい。胎土は灰黄褐色・黒褐色・赤色を呈する。

瓦（第16図）1～5は中国系の押圧波状重弧文軒平瓦で、胎土はいずれも精良で堅緻に焼成され、灰色～緑灰色を呈する。1・2・4がSD15、3が3層（C-1）、5は2層（C-2）出土である。これら中国系瓦に伴って瓦製鴟吻片（鰭・基部など）が出土している（図版10-b）。

銅銭（第16図）1は太平通宝（北宋 初鋳年976年）で1層（SB01東側）、2は判読不能で1層（SB01）、3は□禧□□でSB01トレンチ、4は嘉定通宝（南宋 同1208年）でSK05出土である。

土製人物像（図版10-a）素焼きで表面に胡粉を塗布し彩色を施すが、そのほとんどが剥落している。唐子の坐像であるが、全形を窺うまでには接合できない。土製人物像としては大型のもので、全長30cm前後に復元されようか。胎土は非常に精良なものである。SK05、1層（A/B-1/2）出土である。

註1　本報告書の中国陶磁器の分類は山本信夫「陶磁器分類編」『大宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集 2000による。Ⅲ類で分類にないものは、分類の趣旨を踏まえた上でⅠ類の中分類以下を用いた。青磁の器種や部位の名称については森達也「宋・元代竜泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁1999-2000 VOL.29』東洋陶磁学会2000を参考にした。

Ⅳ 小結

A-1 層掘り下げ時検出の土坑 SK05･06 からは土師器小皿・杯が大量に出土した。出土した土師器の法量平均値は、SK05 が小皿（口径 8.2cm、器高 1.2cm）・杯（口径 12.6cm、器高 2.6cm）、SK06 では小皿（口径 8.1cm、器高 1.2cm）・杯（口径 12.5cm、器高 2.7cm）とほぼ同一の数値を示す。土師器小皿は杯からの分化以降、年代が下るとともに小型化が進むが、SK05･06 から出土した小皿の法量からみると大宰府史跡 SK830 段階と等しい（註１）。但し、その段階から器高を高めた小皿 b が出現するが、SK05･06 ではみられない。杯は分化以降、年代が下るとともに大型化、底部切り離しがヘラから糸切りに転換後は小型化を始め、大宰府史跡 SK830 の段階では口径が 12cm 前後と最少となり、次の SX1200 新期段階では大型化に転ずる。SK05･06 出土の杯の口径については SX1200 新期に近い。SX1200 は大宰府史跡 45 次調査で検出された池状遺構で、龍泉窯系青磁Ⅲ類の他、最下層から「……元□（徳カ）二年……」（1330）の紀年銘を有する卒塔婆が出土している。大量に出土した土師器は法量から二分され、古期の一群は前段階の SK830 と同一の法量である。実年代について SK830 を 14 世紀前後、SX1200 新期は 14 世紀中頃と考えられている。SK05･06 が掘り込まれた１層は 14 世紀中頃以前とみられる。１層から出土した龍泉窯系青磁鐔状口縁蓮弁文杯（61）Ⅲ -4、鐔状口縁無文杯（63）Ⅲ -2 は高台端部の幅が広く、1323 年に慶元から日本に向けて出帆した寺社造営料唐船とみられる韓国新安沖沈船引揚げ資料の中に見られるⅢ' 類に細分されよう。陶器壺（37）も酷似するものを見出すことができる。鎬蓮弁文碗を見ると、SK06 や１層からは蓮弁の幅が狭い碗Ⅱ -c が出土しているのに対し、２層からは先行する型になる蓮弁の幅が広いⅡ -b が出土している。１層から出土した龍泉窯系青磁の内、砧青磁形無文碗Ⅲ -1 や鐔状口縁無文杯Ⅲ -2 など二次的な被熱によりただれているものがみられる。13 世紀後半から出現する先行する型であるが、１層には焼土や炭化物ブロックが多く含まれていたことと合わせ考えると、１層は正慶２年（1333）の菊池武時による博多焼き討ちの復興に伴う整地層の可能性が推測される。大宰府の年代観とも矛盾するものでない。伽藍復元案の内、62･90 次調査検出道路遺構の勅使門付近へ至る延長を中世後期の伽藍中軸線とし、三門前方に描かれた総門が幹線道路に面していたとみなし 30m 前面に出し、三門以下の伽藍の建物も前面に出すと、今回報告の 72 次調査地と庫司推定地とは 20m 前後の至近の位置となる。出土した中国陶磁器は什器を管理した庫司に備えられていたものが、戦乱等により破損し、廃棄されたものであろう。

４層上面で検出した溝 SD15 からは、龍泉窯系青磁碗・浅形碗 I-4 類の他、中国系の押圧波状重弧文軒平瓦や瓦製鴟吻片が出土している。聖福寺は宋人が建立した博多百堂の跡に 13 世紀初頭前後に創建されたとされる。溝 SD15 の埋没時期は 12 世紀後半とみられ、中国系瓦や鴟吻はやや先行する時期に宋人百堂の主要な建物の甍をなしていたのであろう。73 次調査の南東 100m に位置する 194 次調査では花卉文軒丸瓦、押圧波状重弧文軒平瓦、瓦製鴟吻など中国系瓦磚がこれまでの博多遺跡群の調査中最も大量に出土している。

註１　土師器の編年は横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978 による。

挿図番号	番号	器種	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	挿図番号	番号	器種	出土遺構	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
第７図	1	土師器 小皿	ＳＫ０５	7.9	1.1	5.9	第７図	49	土師器 小皿	ＳＫ０６	7.8	1.4	4.5
	2	平均口径 8.2		7.8	1.1	5.9		50			8.0	1.0	6.1
	3	平均器高 1.2		7.8	1.1	5.5		51			8.1	1.1	6.6
	4	平均底径 6.1		7.9	1.2	5.6		52			8.2	1.2	6.8
	5			7.8	1.3	5.5		53			8.3	1.2	6.1
	6			7.9	1.4	6.5		54			8.2	1.1	6.6
	7			7.8	1.4	6.8		55			8.2	1.3	5.0
	8			7.9	1.2	6.0		56			8.5	1.2	5.5
	9			7.9	1.4	5.4		57			8.4	1.3	6.2
	10			8.1	1.2	5.9		58			8.5	1.5	6.3
	11			8.1	1.3	6.2		59			8.5	1.6	5.9
	12			8.2	1.1	5.5		60			8.8	1.4	6.7
	13			8.2	1.1	5.8		61	土師器 杯		12.2	2.5	7.5
	14			8.2	1.2	5.8		62	平均口径 12.5		12.2	2.6	8.3
	15			8.3	1.3	6.2	第８図	63	平均器高 2.7		12.4	2.9	7.9
	16			8.3	1.2	6.2	第７図	64	平均底径 8.3		12.4	2.8	8.1
	17			8.3	1.3	6.2		65			12.5	2.5	8.8
	18			8.2	1.3	5.8	第８図	66			12.5	2.6	8.9
	19			8.4	1.2	6.6	第７図	67			12.4	2.7	8.4
	20			8.6	1.3	6.2		68			12.5	2.9	8.2
	21			8.6	1.4	7.0	第８図	69			12.7	2.9	8.0
	22			8.7	1.3	6.8	第７図	70			12.9	2.6	9.0
	23			9.0	1.1	7.9	第８図	71	土師器 小皿	包含層	6.8	1.3	4.9
	24	土師器 杯		12.0	2.8	8.3		72			7.7	1.8	5.8
	25	平均口径 12.6		12.2	2.2	7.9		73			7.5	1.0	5.8
	26	平均器高 2.6		12.2	2.7	7.4		74			7.8	1.0	6.2
	27	平均底径 8.2		12.2	3.0	7.8		75			7.8	1.3	5.9
	28			12.5	2.8	8.0		76			8.1	1.2	5.9
	29			12.5	2.7	7.6		77			8.0	1.5	5.8
	30			12.6	2.8	8.3		78			8.4	1.3	6.0
	31			12.6	2.9	7.8		79			8.5	1.2	6.5
	32			12.6	2.9	7.9		80			8.3	1.4	6.9
	33			12.6	2.7	8.8		81			8.5	1.5	6.5
	34			12.7	2.8	8.9		82			9.2	1.4	7.7
	35			12.6	3.1	7.8		83	土師器 杯		11.3	2.3	7.7
	36			12.8	2.6	8.4		84			11.9	2.2	9.0
	37			12.8	3.0	8.1		85			12.3	2.9	7.9
	38			12.9	3.0	9.0		86			12.4	2.8	8.0
	39			12.6	2.8	9.0		87			12.6	2.5	9.2
	40			13.2	2.9	8.8		88			12.6	2.7	8.4
	41	土師器 小皿	ＳＫ０６	7.4	1.4	4.9		89			12.7	2.2	8.1
	42	平均口径 8.1		7.6	1.2	5.9		90			12.8	3.1	8.9
	43	平均器高 1.2		7.7	1.0	5.5		91			12.4	2.6	8.4
	44	平均底径 5.8		7.7	1.0	4.9		92			12.7	2.5	8.6
	45			7.8	1.3	4.9		93			12.9	2.4	8.7
	46			7.9	1.2	6.2		94			13.0	2.6	8.3
	47			7.8	1.1	6.0		95			12.9	2.2	9.3
	48			7.8	1.4	5.1							

第２表　博多遺跡群第 73 次調査 土師器計測表